

文化・芸術

青色染分け絞り縮絨織物

1992年

新井淳一 (1932~2017年)

本作も、前回ご紹介した作品と同じく、「ウール(羊毛)は洗うと縮む(縮絨へしゅくじゅうする)」という特質を生かした作品です。もう一つの特徴は、経糸(たていと)にナイロン平銀糸を使用しているところです。

さらに、ご覧いただければわかるように、真ん中の部分だけ質感が違います。これは、ここだけ縮絨させていないためです。真ん中の部分だけ縛って防染し、左右をそれぞれ違う色で染める。染める過程で、緯糸(よこいと)がウールのため縮絨が起こり、細かい皺(ひだ)のある織物になるのです。

防染された部分も左右の縮む力にひっぱられて大きくなねり、流れるようになめらかな光沢が現れています。縮絨している部分は、フェルト化したウールの波間からキラキラと金属系の輝きが現れては消え、見る角度によって瞬きながら繊細な光を放っています。織りへのこだわりだけでなくさらに加工をすることによって、一枚の織物の中にいくつもの表情を生み出しています。

(池田)

〈名画の扉〉

大川美術館企画展から

